

中部ブロック会報 第24号

平成21年度中部ブロック研究会 【1日目】2010年1月9日(土) 13:00～18:00 【2日目】2010年1月10日(日) 9:10～12:15
開催地：一宮女子短期大学 〒491-0938 愛知県一宮市日光町6

【平成21年度・中部ブロック研究会を終えて】 ブロックリーダー 岡野 絹枝



平成22年1月9日・10日、一宮女子短期大学において、今年度ブロック研究会が開催されました。開催校の幹事はじめ運営委員一丸となつての準備の下に、会員33名、非会員2名、学生6名の計40名参加の初日を迎えました。“プレゼンター・オブ・ザ・イヤー賞2010”については、ブロックからの出場者が決まり、プレ発表で温かいアドバイスが飛び交いました。“学生プレゼンテーション・コンテスト”も今年5年目を迎えることができました。9件の研究発表も大変活発に行われました。中部ブロックの活気ある研究会は、今まで牽引されてきた歴代ブロックリーダーのお陰であると感謝しております。私は、次の世代への橋渡し役として、

この2年間ブロックリーダーをお引き受けしました。

さて、昨今の経済情勢悪化がもたらした様々な影響によって、若者たちが大変な苦境に立たされています。例えば、北陸地域では、求人数の減少によって、短期大学生のための採用枠が縮小すると共に、4年制大学生、短期大学生の枠を設けずに採用試験を行う企業が増えたため、短大生にとっては、従来の採用試験対策では対応できなくなってきている現状があります。4年制大学生も採用の狭き門に向かって大きな試練を受けています。

それらに対応するためには、学生達がビジネス実務分野で学んでいる専門知識や技能をより密度濃く身に付けることができるようにすること、また、社会人基礎力の要素にも入れられている主体性や課題発見力、自己表現力などを更に養う必要があります。加えて、一般常識試験やSPIなどの筆記試験にも耐えられる学カトレーニングも必要です。

このような状況だからこそ、いよいよ私たちの出番です。私たちはビジネス実務学会で研鑽を積ませてもらった知的集団です。また、いつも現場で学生たちと悩みや喜びを共にしている現場を知る集団でもあります。現場にいる人間は強いのです。現場という地に足の付いた先生方が、諸状況を越え、お互いの研鑽を発表し合い、情報を共有し、切磋琢磨し、共により良い学生支援をされようとしていることに、私は研究会の度に感動しています。

終わりに、今回の研究会事務局をお引き受けくださった佐久間先生には、問題が生じてもにこやかに対応されるお人柄と終始一貫したご尽力に深謝申します。

プレゼンター・オブ・ザ・イヤー賞出場 プレ発表

「経営実務教育へのデザインプロセスの導入～クリエイティブワーカーの創出をめざして」

町田 由徳 (岡崎女子短期大学)

岡崎女子短期大学経営実務科において平成21年度より実施しているプロダクト・デザイン教育について、クリエイティブな改善思考を持ったワーカーを育成するという観点でそのメリットを発表した。今回プレ発表を経験させていただき、10分間という限られた時間の中でシンプルで訴求力のあるコンテンツを作成することの難しさを感じるとともに、内容や表現手法について一層の工夫が必要であると認識した。今後は参加者の先生方からいただいたご意見、ご指摘を元に内容の再構築を行ない、全国大会では共感を呼ぶプレゼンテーションを目指したい。

中部ブロック研究会助成研究報告「大学生の起業意識調査」

川口 直子 (愛知学泉短期大学)、水口 美知子 (名古屋経済大学短期大学部)、河野 篤 (中部学院大学)、平田 祐子 (高田短期大学)、寺島 雅隆 (愛知学泉短期大学)



ビジネス実務教育の目的は、学生の働く意識・資質・能力を育てるものである。本研究では、その教育方法の一つに『起業家・起業意識を高めること』を加えることとし、その効果的実践のための準備段階として学生への起業意識調査を行った。7大学707名の学生に調査をしたところ、起業したいと答えたのは、28%にあたる200名であり、起業したくないと答えたのは、72%にあたる507名であった。起業したい理由として多かったのが、「好きなことを仕事にしたい」「自分の店・会社を持ちたい」といったものであった。逆に起業したくない理由として多かったのが、「自分には起業する能力がない」「起業にはお金がかかる」「失敗するのが怖い」といったものであった。

起業したい比率は予想よりも多く、自由記述を鑑みて、起業したいと考える学生が意欲的であると捉えることができた。さらに4月以降、詳細なアンケート調査を実施していく予定である。

【学生プレゼンテーション・コンテスト】



最優秀賞：折田 茜さん (富山短期大学)、優秀賞：政田 麻美さん (金城大学短期大学部)
優秀賞：水口 彩乃さん (富山短期大学)、努力賞：園木 真央さん (金城大学短期大学部)
努力賞：杉浦 綾香さん (名古屋経営短期大学)、努力賞：玉井 久美子さん (岡崎女子短期大学)

「学生プレゼンテーションコンテスト」は、中部ブロック研究会を象徴するイベントの一つ。本年も6名のプレゼンターが、審査員3名を良い意味で大いに悩ませてくれた。結果は予想通り小差であったが、審査員間で評価値に大きなバラツキもなく、集計結果は妥当であったと考える。

審査の「決め手」となったのは、①発表コンテンツが持つメッセージ性の高さ、②適度なアクション、③聴視者の特性を考慮した「情報量」の3点。特に③については、相手は高度な知識・教養を有する学会員。スピーディーに、そして思い切った多くの資料を提示してくれてよい——これが審査員の共通見解であった。

ところで、「技量の高まり」は時として規則の見直しに直結する。例えば、コマネチが10点満点を連発して以来、採点規則を大幅に改正した体操競技を思い起こすとよい。プレゼンターのステップアップのためにも、新たな評価の枠組みを再構築することが、研究者たる学会員の課題と言えるかもしれない。

ともあれ、そのような議論とは無関係に、今回のプレゼンテーションは本当に素晴らしかった。プレゼンターの学生諸姉、指導に当たられた先生方に、今一度心から拍手を送りたい。梅村 信夫 (名古屋学芸大学短期大学部)

【懇親会】

今年度の懇親会は、会場を提供くださった一宮女子短期大学さんの学生食堂をお借りして、ブロック研究会の準備一切を取り仕切ってくださった佐久間潔先生とサプリーダの川口直子先生のご尽力なしにはなかったであろう内容の料理が私たちを迎えてくれた。まずもって、開催のご案内文書に予定メニューが書かれていたことも斬新な計らいだったが、お正月明け・・という日程もあり、洋風オードブルにはおせち料理がイメージされていたり、生ハム・ローストビーフなど高級感漂うもの、お寿司も質の良いネタで、目にもお腹にも大満足なメニューであった。ワインやケーキを堪能する姿もそこかしこに見受けられ、学生プレゼンの3名を加え、25名の談笑が絶えないまま1時間30分が過ぎ、お開きとなった。西川 三恵子 (名古屋経営短期大学)

【開催校から】

研究会に参加された会員の皆さん、お疲れ様でした。今回、開催校を引き受け、何とか無事に終了できて「ホッ!」としています。当初「開催校を」と言われた時、深く考えず、その場で「良いですよ」と応えたものの大丈夫が少々心配でした。しかし、「結果オーライ」と思っています。他校の皆さんも気軽に引き受けてみて下さい。必ず何か良いことがありますから。

さて私が今回、印象に残りましたことは、食べ物に関することでしょうか。本学会の研究会に参加される方は、地元の銘菓をお持ち下さるので、美味しいお菓子が幾種類も食べられたことです。甘党の私は、とても美味しくいただくことができました。また、今回お願いした学生食堂を運営する共和食品さんの懇親会の料理は、懇親会参加の皆さんからとても評判も良く、皆が美味しく食べることができ大満足です。次回の研究会は、北陸とのことですので日本海の美味しい魚がたくさん食べられる研究会になると良いな、と思います。研究発表については、開催校としての業務により聞かれぬ発表もあり、ご発表なされた方には失礼をしてしまいました。しかし参加者の皆さんの表情からすべての発表がとても充実したものであったことと理解しています。美味しい食べ物と充実した研究発表で、良い研究会であったと自己満足です。佐久間 潔 (一宮女子短期大学)

【For 2010 ～これからのご案内～】

- 1 「2010年全国大会」の開催要領が決まりました。ぜひご予定にお入れください。
(日 時) 2010年5月29日(土) 10:00～5月30日(日) 12:15 (会 場) 自由が丘産能短期大学
(テーマ) 「ビジネス実務教育と初年次教育」
- 2 「初年次教育事例報告」について、ブロック代表者を募集します。
上記全国大会で、各ブロックからの「初年次教育事例報告」がプログラムに組み入れられることになりましたので、発表者を募集します。すでに取り組んでいる方は勿論、これから取りかかる方も奮ってご応募ください。★応募先：okano@kinjo.ac.jp・締切：3月末
- 3 「ブロック助成共同研究」について、2件募集します。助成金は1件50,000円。
グループ応募でも、個人でテーマを応募して共同研究者を募る方法でも結構です。こちらも奮ってご応募ください。(応募方法：同上)
- 4 「2010ブロック研究会」の開催予定です。来年度の研究計画にお入れください。
(日 程) 2011年1月8日(土) 13:00頃～1月9日(日) 12:00頃 (開催地) 北陸
- 5 「会員数の増加、研究テーマの意見収集など」も来年度の目標にしています。
非常勤講師の方々にも当学会をご推薦ください。研究テーマのご要望についても、岡野までご意見をお寄せください。今年もどうぞよろしくお祈りします。

【編集後記】

暖冬といわれておりました今冬、異常な暖かさを感じさせる日があるかと思えばドカ雪に見舞われ、世の中の状況さながら不安定な毎日ですが、みなさまにはいかがお過ごしでしょうか。中部ブロック研究会では、多くの方のご出席、数々の有意義なご発表をいただきました。その模様を本広報に掲載させていただきます。また、今回は新しく「コラム欄」を加えました。中部ブロックの会員同士の気楽なおしゃべりコーナーです。仕事・研究・趣味・関心事など、内容はおまかせです。発行回数の少ない広報ではありますが、その都度、この「コラム欄」がコミュニケーションに役買えることを願っています。今回ご執筆くださいましたみなさま、感謝申し上げます。(川口・寺島)

研究発表①「卒後1年の職業観」

笹瀬 佐代子 (岡崎女子短期大学)



短大卒業後1年の間に職業生活を経て、職業観、ライフコース希望がどのように変化のしたのかを調査した。働き方に対する変化を、学生時代と入社後で比較すると、「学生時代は私生活中心であったが、現在は仕事・私生活両立を考えている」場合が半数を占めた。仕事内容は、昇進とは関係なく、「人をサポートしたり、同じ業務の繰り返しの仕事で変化していない」傾向が強い。出産後の働き方は、学生時代に考えていたライフコースからほとんどが変わっている。正社員継続型、退職正社員復帰型よりも、退職パート復帰型が増加している。仕事によって成長し、責任感を重視した職業観が形成されている。しかし、短大卒女子の仕事における環境、職業観などは、先行調査と比較すると、十数年経ても同様な傾向が見られ、大きな変化は窺えない。

今後、結婚や出産を経るとどのような変化があるのか、また、卒業時にライフコースが決定されるのか追跡調査を行いたい。

研究発表②「『インターンシップ論』再考～学士力保証の視点から」

手嶋 慎介 (愛知東邦大学)



本研究では「学習者中心の実務教育」の理念に基づく教育観に立つという視点(篠原他2002)から、実施校数・実施率が増加傾向にあるインターンシップについて再考した。企業等の実施主体が「インターンシップ」と称するプログラム(例えばフンデー・インターンシップ)も増加しており、その目的も不明確となってきた。これが本研究の問題意識であり、進学率上昇による学生の多様化をふまえた調査研究の結果(「高等学校在学中に受けた進路指導」という観点からの学生アンケート結果分析により、就業体験についてマイナス評価の傾向にあること等)と教育実践報告を通し、以下の二点を結論とした。すなわち「キャリア支援のための有効な尺度として学習成果を明確化し、地道な取り組みを組織的に継続していく重要性」と「事前・事後指導の強化の必要性」である。学士力保証の一環として、インターンシップがどのような役割を果たすのか等が本研究の今後の課題である。

研究発表③「医療事務関連の資格・検定の種類と試験についての考察」

米本 倉基 (岡崎女子短期大学)



学生の間で不況に強いといわれる医療事務資格への関心が高まる一方で、医療秘書、医局秘書、医療事務、メディカル・クラーク、医師作業補助者、診療情報管理士など、この分野の資格・称号と職務の違いが曖昧なまま、学生が資格取得を目指したり、漠然と進路希望をいただいている。本研究発表は、この問題に対して学生に医療事務職の正確な職種と職務、それに必要な能力とふさわしい資格・検定を明らかにして、加えて医療事務の資格に学生側がいただくイメージ(認識)について調査し考察したものであった。結果として検定・資格試験の実施機関は6団体が存在し、うち財団法人日本医療保険事務協会が実施する「診療報酬請求事務能力検定試験」が代表的な資格として位置づけられ、今後はこの受験指導強化の傾向が高まることが示唆された。

研究発表④「効果的なインターンシップ実施に向けてープログラムを通してー」

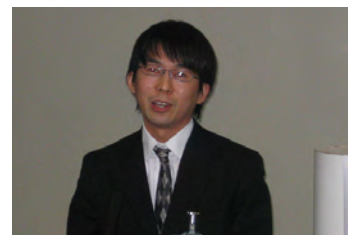
奥村 幸夫 (愛知産業大学短期大学)



1997年に金融恐慌が起きました。その際、ツールの一つとして日本はインターンシップ制度を採用しました。そのインターンシップがスタートして10年以上経過し、再度見直そうと考えました。実はプログラムについて必ずしも学生が満足していないという現状があったからです。特に問題としたのはプログラムでした。今回の発表は日本での導入の経緯を述べ、比較的学生の満足度の高いインターンシップ制度を紹介しました。愛知中小企業家同友会と京都コンソーシアムのプログラムです。プログラムは一般に5つの要素で構成されています。すなわち①事前指導(オリエンテーションを含む)②目標設定③スキルの習得④効果と達成度⑤報告会です。二つの団体ともプログラムは比較的效果的に機能していると考えます。一方、本学および県内他大学の調査の結果、プログラムは十分精査されていないのではないかと結論に至りました。インターンシップ制度をより効果的なものにするためにはプログラムを精査し、この点を配慮して実施することが必要ではないでしょうか。

研究発表⑤「タイポグラフィによるコミュニケーション教育の実践」

町田 由徳 (岡崎女子短期大学)



本学経営実務科では、大学での学習の基礎をゼミナール形式で学ぶ「教養ゼミナール」を1学年前期の必修科目として設定している。本発表は、このゼミナール授業において「タイポグラフィ」(文字を主体としたグラフィックデザイン)によるデザイン制作を行ない、構想から完成に至るまでのプロセスを通して、学生生活、社会生活に必要なコミュニケーション教育を向上させようとした、授業の実践報告である。

ものを作るというプロセスを通じて「いつの間にか多くの事を学んでいた。」という感覚を目指して授業を行なったが、個々の単元について個別に学習するよりも、ものを作りながら継続的に学習して行くことで、より学生の学習意欲に向上が見られると

もに、理解度を高める事が出来た。

今後は、他の授業科目との関連性、連携の重視などを課題点として、より効果的な授業の在り方を模索して行きたい。

研究発表⑥「携帯電話利用による、マナー向上のための一考察」

國田 千恵子 (金沢学院大学短期大学部)、田畑 圭介 (金沢学院大学短期大学部)、小林 淳一 (金沢学院大学短期大学部)、渡辺 直勇 (金沢学院大学短期大学部)



本研究では、社会生活における基本的なマナーや望ましい学習態度を学生生活全般に渡って意識させることにより、マナー意識と学習態度・意欲の向上を促す試みを行った。対象は、ライフデザイン総合学科の1年生である。具体的には、マナーや授業への取り組みに関する項目で構成された「学生生活振り返りシート」を毎週末に学生の携帯メールへ一斉配信し、自己評価後、返信させた。シートは、開始当初、記述式で行ったが、回収の過程で問題が生じたため、所持率100%の携帯電話を利用する方法へ変更した。7月中旬には、シートの実施がマナー意識の向上に繋がったかなどを携帯メールを利用し調査した。

結果、さらなる調査と分析が必要ではあるが、7月の時点で、「マナー意識が向上した」と55%の学生が答えていた。今後は、質疑の際にご教示いただいた、学生へのフィードバックを始め、実施方法の再検討、研究内容とタイトルの整合性についても考えたい。

研究発表⑦「短期大学における簿記検定資格について」

河合 晋 (岡崎女子短期大学)



本学では、近年、金融機関への就職者が増加している。また、三河地区における製造業の不振が影響して、金融機関への就職希望者が増加傾向にある。そこで、金融機関への就職希望学生を中心に、資格に対する意識調査や簿記能力の変化等をみてみた。さらに、就職実績等のある金融機関にアンケート調査をし、求められる資格と学生意識とのギャップについて検討し、学生の資格取得への対応はどうあるべきかを考察した。

資格取得に対する学生の意識は高く、採用選考時に資格が重視されると思うとする回答が80%を超えた。中でもPC関連資格に対する重視度が高く、加えて、金融希望学生の簿記検定・FPへの重視度が比較的高かった。

金融希望学生の簿記能力は相対的に高く、簿記検定に対する意識は高いが、FPへの優先度は低い結果となった。しかし、金融機関ではFPの優先度が最も高く、金融希望学生の資格取得への支援は、FPをさらに推進していく必要がある結果となった。

研究発表⑧「海外研修プログラムの拡充」

島宗 俊郎 (名古屋経営短期大学)



旅の概念はトーマス・クック(英)によって19世紀半ばの禁酒運動大会開催を期に、確定したと言われている。

海外研修には「観光」中心の修学旅行タイプと「学び+観光」の研修旅行タイプなどがあるが、私は「観光+学び+交流」を目的とする3泊4日の韓国研修プログラムを企画、実施した。

今発表は09年2月、本学園姉妹校(ハンガラム高校・ソウル)の日本語コースの生徒たちが公共交通機関を使い、同世代目線で本学学生にソウルを案内するというプログラムで、韓国の自然・歴史・文化に出会い、学び、そこから双方の学生に互敬・共敬の念が生じた海外研修の事例報告であった。

授業担当者として当初危惧した「言葉が通じ合えるのか」、「初対面の短い時間で気心が通じ合うのだろうか」等であったが、双方の学生からは十分楽しめたとの感想もあり、このプログラムが概ね成功であったと安堵している。

今後も「交流」に力点を置いた研修旅行を計画し、さらに充実したものとなるための方策について検討を深めていきたいと痛感した。